ANNUAL REVIEW

2019年度 年次報告書

2019年1月1日～12月31日

一般社団法人
バードライフ・インターナショナル東京

CONTENTS

代表のメッセージ 2

2019年の活動ハイライト 2

環境保全活動

絶滅危惧種の保護 3

森林と湿地の保全 6

渡り鳥の保護 7

海鳥・海洋の保全 8

人材育成・生計向上の支援 9

環境保全活動の評価 10

チャリティーイベントの開催 11

絶滅危惧種支援の基金設立 12

広がる支援の輪 13

収支報告 14

Greetings from the President

代表のメッセージ

バードライフ・インターナショナル東京（以下、バードライフ東京）は2002年4月に発足し、以後17年間着実に環境保全活動を進めてきました。発足当初は渡り鳥の保護など限られた活動でしたが、森林や海洋の保全、地域の人々の暮らしの向上、環境教育、地球温暖化の防止と多様化し、活動地域も世界に広がりました。

2019年は高円宮妃殿下がバードライフ・インターナショナル名誉総裁ご就任15年を迎えられたことを記念し、絶滅危惧種の調査・研究を支援する基金作りに着手しました。また、バードライフの活動をより多くの方々に知っていただくため、Jリーグ鳥の会と覚書を交わし、全国で子供たちに対する環境啓発活動を始めました。

2020年1月
バードライフ・インターナショナル東京
代表
鈴江恵子

Highlights 2019

2019年の活動ハイライト

バードライフ東京では、環境保全活動の推進を軸に企業やバードライフ・パートナー団体との協働を進めることで、2019年は16ヵ国において環境保全活動を展開することができました。

絶滅危惧種の保護

鳥類の約13%が絶滅の危機に瀕しています

コサンケイの保護
ーベトナム

ベトナム中西部の森に見られたキジ科のコサンケイは野生での絶滅が危惧されています。2018年より、経団連自然保護基金の支援を受け、Viet Nature（ベトナムのパートナー団体）と協働で、コサンケイの保護増殖事業を支援しています。

プロジェクト2年目にあたる本年は、保護増殖施設建設予定地の環境影響評価を終えました。9月にはベトナム・ドンホイで第7回国際キジ類シンポジウムを開催し、各国の研究者、動物園職員、現地環境省職員など約100名が来場し、バードライフ東京職員も参加しました。専門家からは放鳥への課題および飼育ケージの捕食者対策に対する意見を得ることができました。ケージの修繕・対策が完了次第、代替種を飼育し、設備の使い勝手を確認する予定です。カメラトラップによる放鳥適地も引き続き調査しています。

ヘラシギの保護
ーミャンマー

世界に400羽しか生息していないヘラシギを保護するため、重要な越冬地であるミャンマーで、パートナー団体と協力し生息地の保全や普及啓発活動を実施しました。

ヘラシギは近年、生息地である干潟の開発などが原因で急激に減少しています。バードライフ東京は、トヨタ環境活動助成プログラムの支援を受け、ヘラシギの約半数が越冬するミャンマーにてBANCA（ミャンマーのパートナー団体）と協働で保護活動を実施しました。詳細なヘラシギの分布調査、地域住民への普及啓発活動や政府との対話などを経て、ラムサール条約事務局に対しモッタマ湾の条約湿地の拡張申請（2017年に指定された条約湿地の約4倍の約16万ha）を行いました。

© Lyon zoo, Emmanuelle Gaujour

シマアオジの保護
ー東アジア諸国

シマアオジはかつてアジアで最も数が多い小鳥類のひとつに数えられていましたが、1990年代以降急速に減少し、現在ではIUCNレッドリストの絶滅危惧IA類に分類されています。2016年から、分布する国々のネットワークを構築して保護を進めています。

2019年には繁殖地のサハリンでロシアと日本の共同調査を行い、越冬地域のカンボジア、タイ、ミャンマーでワークショップを開催しました。中国では密猟の現状に関する分析が行われ、8月にはバードライフの国際保全チーム（モンゴル、ロシア、日本）が中国・長春で開かれた中国鳥類学会議に参加し、今後の保全活動と課題について率直な議論を交わしました。また、中国国家鳥類標識センターと、全ホオジロ類の個体群動態について共同解析を行うべく調整を進めています。本事業は独立行政法人環境再生保全機構地球環境基金の助成を受けています。

ヤンゴン大学でBird Watching Clubを設立

Emberiza aureola

© James Kwok

シマアオジ

絶滅危惧種保護のための車両の寄贈
ータヒチ、ミャンマー

絶滅危惧種の保護活動を促進させるため、バードライフのパートナー団体に車両を寄贈する活動を進めています。2019年は、タヒチとミャンマーのパートナー団体に寄贈しました。

今年で4年目となるこの活動では、トヨタ自動車株式会社の支援のもと、毎年2台の車両を2つの国のパートナー団体に寄贈しています。MANU（タヒチのパートナー団体）に寄贈された車両は、タヒチ島の固有種タヒチヒタキなどの生息地の復元活動や環境教育などの保全活動に、BANCAに寄贈された車両は、ヘラシギなどの干潟を利用する渡り鳥の鳥類調査や啓発活動を始めとする保全活動に、役立てられています。

Toyota Motor Corporation

タヒチに寄贈された車両とパートナー団体

アオキコンゴウインコの保護
ーボリビア

ボリビアの固有種であるアオキコンゴウインコはわずか300羽しか生息していません。ボリビアのパートナー団体と協働で、アオキコンゴウインコの保護活動を開始しました。

ボリビア北部のサバンナ低湿地と呼ばれる特徴的な生態系にのみ生息するアオキコンゴウインコは、開発や密猟などで数を減らし、このままでは絶滅してしまうと考えられています。バードライフ東京は、トヨタ環境活動助成プログラムの支援を受け、アルモニア協会（ボリビアのパートナー団体）と協働で保護活動を開始しました。アオキコンゴウインコと地元の畜産業の共生を図るために畜産農家への普及啓発活動を実施しました。

Ara glaucogularis

アオキコンゴウインコ

ヒガシシナアジサシの保護
ー東アジア諸国

ブルーン・インドネシア（インドネシアのパートナー団体）の協力を得て香港観鳥会（香港の野鳥の会）と進めている共同プロジェクトで、東インドネシアで越冬するヒガシシナアジサシの保全調査が３年目に入りました。

2018年から2019年にかけて、インドネシアで計５羽のオオアジサシ（ヒガシシナアジサシの近縁種）に、また香港では２羽のマミジロアジサシに衛星発信器を装着しました。その結果、これまで知られていなかった渡りの経路や行動圏が明らかとなっています。これらの経験を基に、インドネシアで2020年初めまでにヒガシシナアジサシを捕獲する予定です。また、このプロジェクトを通じて、越冬地は近々海洋保護区に指定されます。バードライフ東京はインドネシア政府の現地機関・地元大学を招いて保全研修ワークショップを開催し、現地機関による保全活動の継続性を高めつつ、事業を進めています。

Thalasseus bernsteini

ヒガシシナアジサシと雛

Thalasseus bergii

人口衛星追跡発信器を付け放鳥

森林と湿地の保全

年間1300万ヘクタールの森林が失われています

テクノロジーを活用した森林保全
ーインドネシア

インドネシア・スマトラ島の熱帯雨林「ハラパンの森」で、ドローンやスマートフォンを活用した森林パトロールの運用を開始しました。

同地域では、パームオイル生産のためのアブラヤシのプランテーション農園開発のため大規模な森林破壊が進んでいます。バードライフ東京はブルーン・インドネシアと協働で、約10万haの森林を守る「ハラパンの森」プロジェクトを立ち上げています。2019年は富士通株式会社の支援を受け、違法伐採や密猟の防止のための森林パトロールにスマートフォンを導入し、パトロールのデータ収集の大幅な時間短縮を実現しました。またドローンを活用することで、違法活動の現場をおさえ、密猟者の検挙につながるなどテクノロジーを活かしたパトロールが成果を上げています。

マングローブの復元
ーマレーシア、メキシコ

生物多様性だけではなく地域住民の生活にとっても重要なマングローブを守るため、マレーシアとメキシコのパートナー団体と協働で、マングローブの植林と持続可能な利用を推進する活動を実施しています。

マングローブは世界で最も速い速度で消失・劣化が進んでいる生態系の一つです。株式会社リコー（以下リコー）の支援を受け、2011年からマレーシア自然協会（マレーシアのパートナー団体）と、2015年からプロナチュラ（メキシコのパートナー団体）と協働で、マングローブの保全活動を行っています。マレーシアでは地域住民主導で保全に取り組む体制づくりを目指し、鳥類調査や植林活動等を行いました。メキシコでは持続可能な利用の推進のため、植林活動に加えマングローブの森で養蜂を実施しました。

ワイズユースによる湿地保全
ーカンボジア

東南アジア最大の湖、トンレサップ湖の南端にあるストゥン・セン湿地には、独特な生態系が形成されています。2018年に国内5番目のラムサール条約登録湿地に指定されました。

カンボジアのストゥン・セン湿地には、多くの絶滅危惧種が生息するほか、多くの人々が湿地の恵みを受けて暮らしています。バードライフ東京は、この湿地を保全し、湿地の賢明な利用（ワイズユース）を推進するため、環境省からの請負事業として2016年より活動を実施してきました。2018年にラムサール条約登録湿地となり、それを記念して2019年１月に多くのステークホルダーを招待して国際ワークショップを開催しました。

アフリカでの植林活動
ーブルキナファソ

森林劣化と砂漠化が深刻な問題となっている西アフリカ・ブルキナファソ北部において、地域住民と協働で植林活動を行っています。

ブルキナファソ北部のウルシ湖周辺は、世界で最も砂漠化が急速に進んでいる地域です。森林の復元を目指して、2011年からリコーの支援を得てナチュラマ（ブルキナファソのパートナー団体）と協働で植林活動を実施しています。リコーがスポンサーをするプロゴルフトーナメントでの選手の成績や、リコー環境事業開発センター（御殿場市）への訪問者が行うエコ宣言の数などによって植林本数が決められています。

渡り鳥の保護

渡り鳥の保護には渡りルート上の生息地を守らなければなりません

渡り性水鳥とその生息地の保護 ー日本

渡り鳥の重要な生息地「フライウェイ・サイト」の保護と適正な管理を進めるため、自治体及び地域のNGOを対象とした研修会を開催しました。

渡り鳥を守るためには、繁殖する場所、渡りの途中で羽を休める場所、冬を越す場所を渡りのルート全体で守っていかなければなりません。特に重要な生息地は、国際協定である東アジア・オーストラリア地域フライウェイ・パートナーシップのもと、フライウェイ・サイトに指定され、渡り鳥を守るため適正な保護・管理をしていくことが求められています。2019年は環境省からの請負のもと、北海道の11の自治体を対象に、フライウェイ・サイトの保護・管理に関する研修会を実施し、生息地の保護に向けた取り組みを強化しました。

渡り鳥保全の普及啓発 ー日本

2017年より、市民団体が行っている渡り鳥の保全活動を支援する「フライウェイ・サイト保全プログラム」を展開しています。

3年目となる2019年は、ダウ・ケミカル日本株式会社の支援のもと、新潟県の福島潟、瓢湖におけるガンやハクチョウの保全、岡山県吉備中央町でのブッポウソウの保護活動を推進しました。岡山県では3年間の活動成果として、日本野鳥の会岡山県支部主催でブッポウソウフォーラムが開催され、全国から180名の参加者が集まりました。絶滅危惧Ⅱ類に指定されているブッポウソウの生態や、各地での保護活動について意見交換し、同種の保護に向けた新たな知見を共有しました。

Training workshop

フライウェイ・サイト保護のための研修会

Eurystomus orientalis

森の宝石「ブッポウソウ」

海鳥・海洋の保全

海鳥と漁業の共存に向けた保全活動に取り組んでいます

© Darren Fox

遠洋マグロはえ縄漁における海鳥混獲の削減 ー日本

マグロを扱うサプライチェーンへの働きかけと、普及啓発活動「南半球アホウドリ物語」をSNSで発信し始めました。はえ縄漁業者、行政、研究者との意見交換を行い、マグロ漁を管理する国際会合にも参加しました。

漁業による混獲（偶発的に漁具にかかること）は海鳥が直面する深刻な問題です。マグロはえ縄漁では、絶滅危惧種を含むアホウドリ類などが犠牲になっています。2019年は、サウスジョージア・ヘリテイジトラストとダーウィン・イニシアティブの支援を受け、サプライチェーンへの働きかけと、SNSを通した啓発活動を始めました。デビッド&ルシール・パッカード財団の支援のもと、ステークホルダーとの意見交換も行いました。

海鳥と刺し網漁の共存を目指す取り組み ー日本

日本野鳥の会（日本のパートナー）、東京大学と協力し、日本国内で刺し網漁による海鳥混獲の可能性が高い海域の特定を行いました。北海道では混獲回避策の開発のため、漁業者の協力を得て洋上実験を行いました。

刺し網漁業により、世界中で毎年推定40万羽の海鳥が命を落としています。2019年はキングフィッシャー財団の支援を受け、日本国内で刺し網漁による混獲が起こりやすいと思われる海域を特定する「ホットスポットマップ」の作成を行いました。当事業では、多くの海鳥が繁殖する北海道羽幌町の漁業者の協力を得て、混獲削減に向けた対策網を開発するため、洋上実験も行いました。

人材育成・生計向上の支援

人を育て、暮らしを支えて環境を守っています

SATO YAMA UMIプロジェクト ーカンボジア、ブータン、ベトナム

環境教育用の教材開発、普及啓発活動や現地若手スタッフの育成を、カンボジア、ブータン、ベトナムの3カ国で実施しています。公式ウェブサイトを通して、プロジェクトの活動を多くの人々と共有しています。

SATO YAMA UMIプロジェクトは、経団連自然保護基金の25周年記念特別基金助成事業の支援のもと、日本環境教育フォーラム、コンサベーション・インターナショナル・ジャパンとの共同プロジェクトとして、2017年に立ち上がりました。本プロジェクトでは、アジア・パシフィック地域の6カ国で、持続可能な社会の実現に向けた次世代の人材育成を実施しています。2019年は、カンボジア、ブータン、ベトナムの3カ国で、開発した環境教育用の教材を使った授業の実施、普及啓発用のビデオやポスターの作成、様々なステークホルダーを対象とした普及啓発イベントなどを実施しました。公式ウェブサイト（http://satoyamaumi.jp/ja/index.html）で各国の活動紹介をしています。

海洋プラスチックゴミ問題の解決に向けて ー日本

近年、問題が顕著になっている海洋プラスチックゴミ問題について、小学生を対象に、野生生物への影響や対策について学ぶ環境教育プログラムを実施しました。

プラスチックの素材メーカーであるダウ・ケミカル日本株式会社の支援を受け、海洋プラスチックゴミ問題について学ぶ全7回の環境教育プログラムを、千葉県習志野市の谷津南小学校で実施しました。プログラムでは、動物写真家の藤原幸一氏を講師に迎え、世界で起きているプラスチックゴミによる環境問題を学んだ他、谷津干潟で実際にゴミを拾い、どこから流れてきているのかを推定し、生徒が身近なところでできる取り組みを考えました。本プログラムは、全国の小学校を対象にした生活科・社会科の公開研究会でも発表され、今後のさらなる展開が期待されます。

Awareness raising

カンボジアのオオヅル保全普及啓発活動

Cleaning activity

小学生による谷津干潟清掃活動

環境保全活動の評価

より良い環境保全活動のために活動成果の評価を促進します

「シンポジウム：企業の環境貢献活動を評価する」の開催 ー日本

バードライフ・インターナショナルを中心に9つの国際団体が開発した環境保全活動評価ツール「PRISMツールキット」について、企業等が実施する環境貢献活動の評価への活用を推進するシンポジウムを開催しました。

近年、愛知目標やSDGsの達成に関心が高まる中、実施した環境保全活動の成果や有効性を評価し、今後の活動や計画の改善を図ることの重要性が高まってきたことを受け、2017年に環境保全活動を評価するPRISMツールキット（Practical methods for evaluating the outcomes & Impacts of Small-Medium sized conservation projects）が開発されました。2019年は、PRISMツールキットの活用範囲を企業が実施する環境貢献活動にも広げるため、企業の環境部門を対象としたシンポジウムを2月に開催しました。約70名の参加者からは高い関心が示され、本ツールキットを使った評価事例の蓄積などの期待が寄せられました。

Field survey

ヘラシギの越冬地における生態調査プロジェクトの評価

チャリティーイベントの開催

環境への理解を深めながら、環境保全に貢献するチャリティー晩餐会を開催しています

バードライフ東京は自然保護活動支援のため、毎年2回、東京と大阪でガラ・ディナーを主催しています。全国の企業や個人の方々からご協賛をいただき、チャリティーオークションを行い活動資金としています。

2019年は絶滅危惧種の継続的な調査研究支援を目的に設立されたBirdLife International Japan Fund for Scienceの他、マレーシアのオナガサイチョウの保護をテーマに開催しました。3月の大阪ガラ・ディナーでは2,189万円を、10月の東京ガラ・ディナーでは3,960万円の収益金を集めることができました。収益金は、BirdLife International Japan Fund for Science基金、レッドリスト支援、マレーシアのオナガサイチョウの保護などに活用させていただきました。

Charity auction

支援金づくりのオークション

Honorary President

特別賞を抽選する名誉総裁の高円宮妃久子殿下

BirdLife International Japan Fund for Science 基金の設立

バードライフの科学に基づいた調査・研究を支援していきます

© Ciro Albano

© Fernando Calmon / Shutterstock

© Shutterstock

© D. R. Weller Photography

2019年、高円宮妃久子殿下の名誉総裁ご就任15周年を記念し、BirdLife International Japan Fund for Science基金を設立致しました。

この基金によって、バードライフが世界中で行う鳥類の保護や自然環境保護の基礎となる調査研究活動を支えていきます。これらの研究は、バードライフだけでなく、様々な国際機関や政府にも基礎データとして提供され、自然保護に役立てられます。大阪ガラ、東京ガラでの収益金の一部を充当した他、すでに数名の篤志家の皆様からのご寄付や、ダウ・ケミカル日本株式会社、ショパール・ジャパン株式会社による長期的なご支援も始まりました。

Red Data Book

世界の絶滅危惧種を集めたRed Data Book

Major Supporters

広がる支援の輪

理念や活動に共感する多くの方々からご支援いただきました

Bird Life Supporter's Club

BLS（バードライフ・サポーターズ・クラブ）

有志の麻酔科医の方々で結成されたバードライフ・サポーターズクラブから継続的なご支援をいただいています。今年結成3周年を迎え、8月にホテルオークラ東京で祝賀会を開催しました。また、この活動からインドネシアの森林地帯に住む人々に対する医療支援のNPO法人、バードライフ・インターナショナル・メディカル・サポートが発足しました。

Jリーグ鳥の会

8月に、バードライフ東京は、鳥がモチーフのマスコットを有するJリーグの18クラブチームで構成される「Jリーグ鳥の会」と協働して環境保全活動をすることを宣言しました。第一弾として、9月にバードライフ・インターナショナル名誉総裁の高円宮妃殿下が、ギラン「会鳥」の所属するギラヴァンツ北九州の本拠地、北九州市をご訪問され、今後の活動について話し合われました。

高麗若光の会

昨年に続き12月に高麗若光の会の皆様よりご寄付を頂戴しました。会員の皆様は、高句麗から約1300年前に渡来した人々を祖先にもち、日韓の懸け橋となる文化、国際交流を続けています。今後も毎年、寄付金を募っていただく予定です。

Yahoo!ネット募金

Yahoo!ネット募金では、バードライフ東京の運営を支援するページとカンボジアの絶滅危惧種オオヅルの保護を支援するページを新規開設し、森林火災が頻発したインドネシア・スマトラ島の森林での消火活動支援を再開しました。さらにインドネシアへはパトロール用バイク修理費用の支援を、またブラジルには密猟された鳥の野生復帰のための支援を行いました。

法人賛助会員・個人会員

バードライフ東京には、企業や団体による法人賛助会員制度や、個人で活動を支援していただく制度があります。その他にも、絶滅危惧種の保護活動に里親として関わっていただくレア・バード・クラブ会員制度があります。

法人賛助会員

2019年の法人賛助会員は、以下の通りです。

- アルファー食品株式会社
- 出雲大社
- 出雲大社文化事業団
- 高麗若光の会
- 寒川神社
- 株式会社新名工務店
- 伏見稲荷大社
- 北海道神宮
- 真清田神社

個人会員（Friends of BirdLife）

個人会員制度では5,000円を1口（1年間）として寄付を募っています。個人会員の方からのご支援はプロジェクト活動費や団体の運営のために活用させていただきます。振込の他、カード決済による会員の自動継続が可能です。

その他のご支援

- 海外酒販株式会社
- ショパール・ジャパン株式会社
- スフェラーパワー株式会社
- 大本山総持寺
- ダウ・ケミカル日本株式会社
- 公益財団法人日本太鼓財団
- 日本たばこ産業株式会社
- 株式会社ワンステップ

（50音順・敬称略）

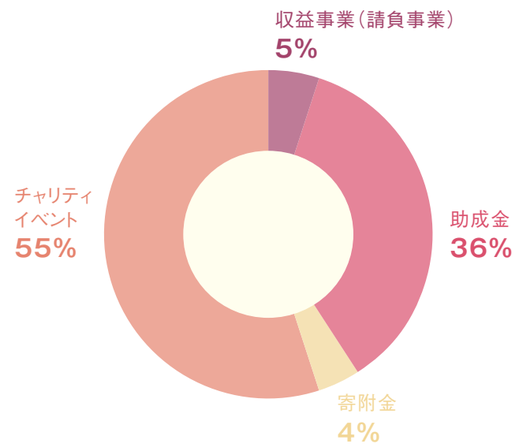
Finances 2019

収支報告

2019年の収支報告は以下の通りです。

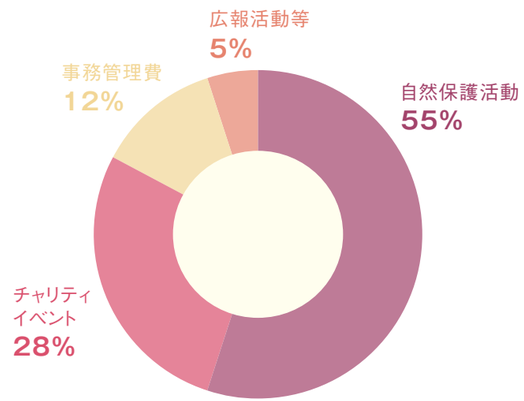
Income

収入
220,615,219円



Expenditure

支出
220,615,219円



※2019年12月末日現在の予測（会計士監査前）

Together we are BirdLife International
Partnership for nature and people

一般社団法人

バードライフ・インターナショナル東京

〒103-0014 東京都中央区日本橋蛎殻町1-13-1 ユニゾ蛎殻町北島ビル1階

TEL: 03-6206-2941　FAX: 03-6206-2942

https://tokyo.birdlife.org